

The Japanese
Society of
Toxicology

Vol. 50 No. 6
December 2025

毒性学ニュース

Toxicology News

一般社団法人日本毒性学会

The Japanese Society of Toxicology

毒性学ニュース

Contents

日本毒性学会からのお知らせ

理事・監事候補者の選挙について	89
2025 年度田邊賞受賞論文一覧	
2025 年度ファイザー賞受賞論文一覧	
2025 年度特別賞・学会賞・佐藤哲男賞（国際貢献賞）・ 奨励賞・技術賞受賞者一覧	93
2025 年度学会表彰受賞者のあいさつ	94

日本毒性学会教育委員会からのお知らせ（第 6 報）	102
第 28 回日本毒性学会認定トキシコロジスト認定試験合格者	104
第 52 回日本毒性学会学術年会要旨集の販売について	105
第 53 回日本毒性学会学術年会のご案内（第 3 報）	106

2026 年度日本毒性学会表彰の推薦について

特別賞候補者推薦要領	111
学会賞候補者推薦要領	112
日本毒性学会佐藤哲男賞（国際貢献賞）候補者推薦要領	113
日本毒性学会学会貢献賞候補者推薦要領	114
日本毒性学会奨励賞候補者推薦要領	115

その他のお知らせ

日本安全性薬理研究会第 17 回学術年会のご案内	116
毒性学ニュース索引（50 卷）	117

一般社団法人日本毒性学会の定款および規程類について

理事・監事候補者の選挙について

2025年11月17日

一般社団法人 日本毒性学会
社員 各位

一般社団法人 日本毒性学会
理事長 広瀬 明彦
総務委員長 藤原 泰之

本年度は次期〔任期：2026年7月2日（社員総会）より2028年社員総会開催日〕理事および監事（役員）候補者選挙の年にあたります。本学会の定款、理事・監事選出規程ならびに理事および監事候補の選出に関する細則に従い、下記の通り選挙を実施することをお知らせ致します。

記

- 選挙による役員候補者の選出数は理事16名、監事2名です。
- 選挙人（選挙権を有する者）は本学会評議員です。
- 候補者（被選挙資格を有する者）は、以下の方々を除く本学会評議員です。

被選挙資格を有しない評議員

- 現理事長（選出規程により自動的に理事に選出）
- 理事または監事を連続二期務めている評議員
- 2026年4月2日の時点で満66歳以上の評議員

- 選挙（投票）は、郵送方式で以下の期間に実施する予定です。

2026年1月16日（金）～2026年3月13日（金）

本会評議員には、2026年1月初旬に投票用紙等と共に「被選挙対象者（候補者）リスト」および「同対象外リスト」を郵送いたします。

- 開票は選挙期間終了後速やかに行い、役員候補者を選出します。選出された役員候補者は、理事会の承認および2026年7月2日に開催予定の社員総会での承認を経て、役員に就任することになります。
- 以上の役員選挙に関しては、「理事および監事候補の選出に関する細則」に則り、理事長が指名した以下の選挙管理委員が執り行います。

選挙管理委員長：務台 衛

選挙管理委員会委員：朝倉省二、安西尚彦、奈良岡準、黄基旭

開票立会人（監事）：杉山 篤、三浦伸彦

以上

2025年度日本毒性学会 田邊賞受賞論文一覧

論 文 : Paternal methamphetamine exposure differentially affects first and second generations in mice
 著 者 : Sakiko Munetomo-Aoki, Asuka Kaizaki-Mitsumoto, Ryota Nakano, Satoshi Numazawa

J. Toxicol. Sci. Vol.49, No.1, 9-26, 2024

受賞者 : 光本 (貝崎) 明日香 (昭和医科大学大学院 薬学研究科 毒物学分野)

宗友 (青木) 咲子 (昭和医科大学 薬学部 病院薬剤学講座)

中野 僖太 (昭和医科大学大学院 薬学研究科 生理学分野)

沼澤 聰 (昭和医科大学大学院 薬学研究科 毒物学分野)

論 文 : Developing a GNN-based AI model to predict mitochondrial toxicity using the bagging method
 著 者 : Yoshinobu Igarashi, Ryosuke Kojima, Shigeyuki Matsumoto, Hiroaki Iwata, Yasushi Okuno, Hiroshi Yamada

J. Toxicol. Sci. Vol.49, No.3, 117-126, 2024

受賞者 : 五十嵐芳暢 (国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所トキシコゲノミクス・インフォマティクス
 プロジェクト、国立研究開発法人理化学研究所マルチモーダルA I 基盤技術研究チーム)

小島 諒介 (京都大学大学院医学研究科ビッグデータ医科学分野)

松本 篤幸 (京都大学大学院医学研究科ビッグデータ医科学分野)

岩田 浩明 (京都大学大学院医学研究科ビッグデータ医科学分野)

奥野 恭史 (京都大学大学院医学研究科ビッグデータ医科学分野)

山田 弘 (国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所トキシコゲノミクス・インフォマティクスプロジェクト)

論 文 : Comparative study of susceptibility to methylmercury cytotoxicity in cell types composing rat
 peripheral nerves: a higher susceptibility of dorsal root ganglion neurons

著 者 : Eiko Yoshida, Kazuhiro Aoki, Yu Sasaki, Hinako Izuohara, Tsutomu Takahashi, Yasuyuki
 Fujiwara, Tomoya Fujie, Ke Du, Komyo Eto, Yo Shinoda, Toshiyuki Kaji

J. Toxicol. Sci. Vol.49, No.5, 241-248, 2024

受賞者 : 吉田 映子 (一般財団法人電力中央研究所)

高橋 勉 (東京薬科大学 薬学部)

藤原 泰之 (東京薬科大学 薬学部)

藤江 智也 (東京理科大学 薬学部)

篠田 陽 (東京薬科大学 薬学部)

鍛冶 利幸 (東京理科大学 薬学部)

論 文 : Validation of a new protocol for a zebrafish MEFL (malformation or embryo-fetal lethality) test
 method that conforms to the ICH S5 (R3) guideline

著 者 : Kanako Mori, Yoshinobu Aoki, Fumito Mikashima, Kazushige Maki, Toshio Tanaka, Mai Hayashi,
 Wataru Sugimoto, Mizuho Ono, Saaya Umekita, Tatsuhiko Niino, Michio Fujiwara, Tomonori
 Ebata, Hiromi Hirata, Hajime Kojima

J. Toxicol. Sci. Vol.49, No.8, 337-348, 2024

受賞者 : 小島 肇 (山陽小野田市立山口東京理科大学)

平田 普三 (青山学院大学)

森 華奈子 (アステラス製薬株式会社)

青木 嘉信 (アステラス製薬株式会社)

三ヶ島史人 (独立行政法人医薬品医療機器総合機構)

田中 利男 (三重大学大学院医学系研究科システムズ薬理学)

杉本 航 (マルホ株式会社)

小野美都穂（株式会社三菱ケミカルリサーチ プロダクトスチュワードシップ推進部 リスク評価・新規課題グループ）
梅北さあや（株式会社三菱ケミカルリサーチ プロダクトスチュワードシップ推進部 リスク評価・新規課題グループ）
新野 竜大（三菱ケミカル株式会社 SC レスポンシブルケア本部 化学品&輸出管理・企画部、
株式会社三菱ケミカルリサーチ プロダクトスチュワードシップ推進部）
江畑 知憲（株式会社ボゾリリサーチセンター 御殿場研究所）
藤原 道夫（エムオデッセイ合同会社）

2025年度日本毒性学会 ファイザー賞受賞論文一覧

論 文 : Involvement of Npas2 and Per2 modifications in zinc-induced acute diurnal toxicity in mice
著 者 : Hiroki Yoshioka, Sarah Tominaga, Masumi Suzui, Yasuro Shinohara, Tohru Maeda, Nobuhiko Miura

J. Toxicol. Sci. Vol.47, No.12, 547-553, 2022

受賞者 : 三浦 伸彦 (横浜薬科大学薬学部)

吉岡 弘毅 (北里大学医学部 (旧 岐阜医療科学大学薬学部))

酒々井眞澄 (名古屋市立大学大学院医学研究科)

篠原 康郎 (金城学院大学薬学部)

前田 徹 (金城学院大学薬学部)

論 文 : Involvement of polycyclic aromatic hydrocarbons and endotoxin in macrophage expression of interleukin-33 induced by exposure to particulate matter

著 者 : Nami Ishihara, Tomoaki Okuda, Hiroyuki Hagino, Ami Oguro, Yuto Tani, Hiroshi Okochi, Chiharu Tokoro, Yoshiaki Fujii-Kuriyama, Kouichi Itoh, Christoph F.A. Vogel, Yasuhiro Ishihara
J. Toxicol. Sci. Vol.47, No.5, 201-210, 2022

受賞者 : 石原 康宏 (広島大学)

大黒 亜美 (広島大学)

論 文 : Perfluorooctanoic acid (PFOA) as a stimulator of estrogen receptor-negative breast cancer MDA-MB-231 cell aggressiveness: Evidence for involvement of fatty acid 2-hydroxylase (FA2H) in the stimulated cell migration

著 者 : Genki Sakai, Masayo Hirao-Suzuki, Takayuki Koga, Takanobu Kobayashi, Jun Kamishikiryo, Michitaka Tanaka, Kiyonaga Fujii, Masufumi Takiguchi, Narumi Sugihara, Akihisa Toda, Shuso Takeda
J. Toxicol. Sci. Vol.47, No.4, 159-168, 2022

受賞者 : 竹田 修三 (福山大学 薬学部 衛生薬学研究室)

平尾 雅代 (広島国際大学 薬学部 環境毒物代謝学研究室)

古賀 貴之 (第一薬科大学 薬学部 衛生化学分野)

小林 隆信 (徳島文理大学 香川薬学部 生体防御学講座)

瀧口 益史 (広島国際大学 薬学部 環境毒物代謝学研究室)

杉原 成美 (福山大学 薬学部 衛生薬学研究室)

戸田 晶久 (九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科)

2025年度 特別賞・学会賞・佐藤哲男賞（国際貢献賞）・学会貢献賞・ 奨励賞・技術賞受賞者一覧

特別賞

研究課題名：人工知能開発を駆使した先駆的な『システム毒性学（Systems Toxicology）』推進による毒性学発展への貢献
 氏名：北野 宏明
 所属：特定非営利活動法人 システム・バイオロジー研究機構

学会賞

研究課題名：遺伝子改変、細胞分析、遺伝子発現及びエピジェネティクス解析を包括した網羅的 in vivo 毒性研究
 氏名：北嶋 聰
 所属：国立医薬品食品衛生研究所

佐藤哲男賞（国際貢献賞）

なし

学会貢献賞

受賞タイトル：学会の健全な運営に対する貢献
 氏名：天野 幸紀
 所属：元興和デンタルヘルス株式会社

奨励賞

研究課題名：レポーターマウスを用いた毒性評価系構築と化学物質リスク評価への応用
 氏名：石田 廉士
 所属：岐阜薬科大学 衛生学研究室

研究課題名：ナノ粒子による生殖発生毒性の機構解明に資する胎盤毒性の解析

氏名：東阪 和馬
 所属：大阪大学高等共創研究院

研究課題名：言語モデルを基盤とした毒性研究の深化

氏名：水野 忠快
 所属：東京大学 大学院薬学系研究科

技術賞

受賞者名：久我 和寛（アステラス製薬株式会社）
 研究課題名：機械学習と心拍変動解析を用いた薬物誘発性痙攣の予測法の開発

受賞者名：浜村 えり（第一三共株式会社 安全性研究所）

研究課題名：イヌ及びヒト MRGPRX2 発現細胞を用いた in vitro アレルギー様反応評価系の開発

受賞者名：森 華奈子（アステラス製薬株式会社）

研究課題名：胚・胎児発生毒性評価を目的としたゼブラフィッシュ胚 MEFL 試験法の最適化とその実証

学会賞を受賞して

国立医薬品食品衛生研究所 北嶋 聰

この度、2025年度日本毒性学会学会賞を賜りましたこと深く御礼申し上げます。ご推薦いただきました高橋祐次先生（国立医薬品食品衛生研究所 安全性生物試験研究センター 毒性部 動物管理室 室長）、並びに広瀬明彦理事長をはじめ、その推薦過程から受賞に至るまでの関係各位のご尽力に改めて感謝申し上げます。

この度の受賞対象研究である「遺伝子改变、細胞分析、遺伝子発現及びエピジェネティクス解析を包括した網羅的 in vivo 毒性研究」は、1994年に国立衛生試験所（現国立医薬品食品衛生研究所）の毒性部に就職してから2025年現在に至るまで、30年に亘り、取り組んできたものです。その礎には、大学・大学院時代（東京大学農学部獣医学科・東京大学大学院農学系研究科獣医学専攻 獣医薬理学教室）（指導教官：唐木英明 名誉教授）における研究も、寄与しているものと考えております。

毒性部において、所掌業務を遂行する中で、虚心坦懐になって隈なく検索するという毒性学の特徴である「網羅性」の重要さを、数年かけて体得することができ、このことは、その後の毒性研究を進める上で非常に役立ちました。

従来の化学物質の安全性評価法は、毒性試験において得られたハザードと無毒性量を求めて、様々な不確実性を勘案し、安全係数（不確実係数）で除してリスク評価指標を得て、ヒトにおける安全量を割り出す、というものです。しかし実験動物でもヒトでも、いわばブラックボックスと言っても過言ではないほど、生体内反応が不明な事がまだ多く、このことが、化学物質影響の種差あるいは個体差が生じることに通じるものと考えました。すなわち本研究の根本的な動機は、安全係数にも係る、こうした種差・個体差問題を、より近代的に毒性分子メカニズムの解析に基づいて取り扱えるようにすることにあったのです。そこで、生理学、解剖学や生化学といった基礎的な生物学に分子生物学を導入した各種の毒性学的研究を融合的に展開することとしました。

まず免疫研究を中心に展開していたFACS技術を、精子形成過程に対する毒性影響の分析に応用し、この手法の技術と解析法の開発を一手に担い、数年かけて、セルソーターを用いた精巣毒性評価法の樹立に世界で初めて成功しました。そして、この独自手法を用いて、2000年ごろに問題となった健康食品による毒性事案に実際に対応し、このことから社会実装にまで漕ぎつけたものと考えております。共同研究者がモデル精巣物質を用いて、その実用性の検証をおこなった論文は田邊賞を受賞しており、この解析手法と研究成果につき、一定の評価をいただいたものと考えております。

この研究と並行して、毒性部において1997年から開始した遺伝子改变マウスの自家作製とそれを用いた発生研究に従事し、心臓中胚葉を中心とした中胚葉形成に関する基礎研究を展開するとともに、毒性評価上のヒトへの外挿性向上に向け、毒性学的にリガンド選択性に大きな種差が知られる核内受容体PXR/SXRについて、相同組換えによりリガンド結合部位をヒト型化した遺伝子置換マウスの作製を手掛けました。その有用性を示した論文は田邊賞を受賞しており、この解析ストラテジーにつき、高い評価をいただいたものと考えております。

その後、毒性部において展開する Percellome トキシコゲノミクスに関する研究において、適切なデータベース構築のために重要となる測定物質の選択、用量設定等の実務、加えて、2006年より展開を開始した新型反復投与毒性の成立機序に関する遺伝子発現情報からのシグナルネットワーク解析に、NGS を用いた全ゲノム DNA メチレーション解析、及び、ChIP-Seq を用いたヒストン修飾の網羅的解析によるエピジェネティック機構の解析を組み合わせた包括的な毒性分子機序解析を展開し、インフォマティクスや人工知能（AI）導入による解析規模の拡大や効率向上のプロジェクトにも参画しております。これらの成果は、特に分子メカニズムに基づく毒性予測と評価の立場からの貢献が認められ、日化協 LRI 賞を受賞する機会に恵まれました。

続いて、げっ歯類全身吸入曝露試験の経験とトキシコゲノミクスとを融合し、シックハウス症候群を考慮した極低濃度ガス状物質を吸入曝露した際の、肺、肝及び海馬における Percellome トキシコゲノミクスの開発研究も行ないました。更には、世界に先駆けて、吸入曝露後の動物の情動認知行動試験との組み合わせ、及び、海馬等の中核神経組織の遺伝発現データの解析、等の一連の研究システムの統括を行い、所定の成果を挙げることができました。

このように化学物質の安全性評価法における種差・個体差問題を、より近代的に毒性分子メカニズムの解析に基づいて取り扱えるように、長年にわたり一貫して、取り組んできたことが、今回受賞の理由となったのではないかと考えているところです。今後も、微力ながら日本毒性学会の発展に貢献していく所存です。

物理学や数学の世界では、基本原理を単純化していく傾向にありますが、医学・生物学の分野においては、対象を細分化することで生物の本質への理解が損なわれる可能性があるため、生物を複雑系として扱うことが必要かつ重要と考えます。そこで、生命を全体論的なシステムとして包括的に捉える「システム生物学」や人工知能（AI）との積極的な連携を視野に入れ、引き続き、研鑽し毒性学分野へのさらなる貢献に努めて参りたいと思います。

最後になりましたが、本学会賞を受賞できたことは、この研究に携わってきた毒性部員および共同研究者の成果であり、この場を借りて深く感謝申し上げるとともに、皆で受賞の歓びを分かち合いたいと思います。また、共同研究を行なっていただいた先生方、特に堀井郁夫先生（ファイザー（株））および北野宏明先生（システム・バイオロジー研究機構）に厚くお礼を申し上げるとともに、これまでの研究に対し多大なご指導およびご助言を頂きました元毒性部長の菅野 純先生に心より感謝申し上げます。



北嶋 聰

奨励賞を受賞して

岐阜薬科大学 衛生学研究室 石田 慶士

この度は、「レポーターマウスを用いた毒性評価系構築と化学物質リスク評価への応用」に対し、日本毒性学会奨励賞を賜りましたことを大変光栄に存じます。選考委員ならびに学会関係の先生方に心より御礼申し上げます。

私は現在、独自に作製したレポーターマウスを用いて化学物質の毒性評価に関する研究に取り組んでおります。その中で、エストロゲン応答配列の制御下でルシフェラーゼ (Luc) を発現する E-Rep マウスを用いた、エストロゲン作動性化学物質の新たな in vivo スクリーニング試験法を提案しました。本試験法により化学物質のエストロゲン作動性を生体イメージングで非侵襲的に評価できること、低用量域におけるビスフェノール A のエストロゲン作用 (いわゆる低用量影響) を検出できることを示しました。本試験法は内分泌かく乱化学物質のリスク評価の精度向上に寄与するものと考えております。

また、神経分化マーカーのプロモーター制御下で Luc を発現する Syn-Rep マウスを用いた、発達神経毒性 (DNT) 評価系の構築も試みました。その結果、

Syn-Rep マウスを用いた生体イメージングにより、DNT 誘導が報告されている化合物による影響を脳の Luc 活性変化として捉えることに成功し、その変化が行動異常を反映したものであることを明らかにしました。Syn-Rep マウスは DNT 評価において有用なツールとなることが期待されます。



石田 慶士

今回の受賞を励みに、今後も研究・教育活動に一層精進し、本学会の発展に微力ながら貢献してまいりたいと存じます。最後に、本研究を進めるにあたり多大なるご指導・ご支援を賜りました中西剛先生をはじめ岐阜薬科大学衛生学研究室のスタッフならびに学生のみなさまに厚く御礼申し上げます。

奨励賞を受賞して

大阪大学高等共創研究院 東阪 和馬

この度、「ナノ粒子による生殖発生毒性の機構解明に資する胎盤毒性の解析」に対し、2025 年度日本毒性学会奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。ご推薦頂きました大阪大学微生物病研究所の吉岡靖雄先生、ならびに、本賞選考に関わられました諸先生に深く御礼申し上げます。

私はこれまでに、医薬品・医療機器に加え、食品や香粧品分野等への応用が進んでおり、環境中への廃棄が危惧されている、ナノ粒子に焦点をあて、化学物質に対して脆弱な妊娠や胎児を対象に、物性-動態-毒性の連関解析を基盤とした安全性評価研究に取り組んできました。しかし、ナノ粒子曝露と妊娠転帰への負の影響との連関を明らかにするうえでは、ナノ粒子の生殖発生に対する影響のみならず、その毒性機構の解明が不可欠です。そこで、胎児にとって出産までの“仮の臓器”として不可欠な胎盤での毒性発現を解明することがナノ粒子の生殖発生におよぼす影響とその毒性発現機構の理解につながるものと考え、胎盤毒性学的観点からのナノ粒子の安全科学研究を推進しています。将来的には、ナノ粒子

の曝露実態情報を踏まえた、生殖・発生に対する負の影響の評価とその結果の解釈を試みることで、ナノ粒子による母子健康影響の理解だけでなく、ナノ粒子の社会受容の促進と新技術を活用した安全で豊かな社会の構築に貢献していきたいと念じています。

今回の受賞を励みに、今後も毒性学研究に貢献できるよう努めて参ります。最後に、本研究を遂行するにあたり、ご指導ご鞭撻を賜りました大阪大学大学院薬学研究科の堤 康央先生、ならびに、共同研究でお世話になりました先生方に心より感謝申し上げます。



東阪 和馬

奨励賞を受賞して

東京大学・大学院薬学系研究科・助教／統計数理研究所・統計思考院・特任助教 水野 忠快

この度、2025年度日本毒性学会奨励賞という栄誉を賜りましたこと、誠に光栄に存じます。日頃よりご指導を賜っております皆様、研究をご支援いただいている共同研究者の各位、チームのメンバー、そして学会関係者の皆様に、この場を借りまして深く御礼申し上げます。

私たちが取り組んでいる研究は、生命科学データに内在するパターンの探求、パターン認識です。その根底には「潜在変数」という概念が存在します。これは1904年、心理学者チャールズ・スピアマン(順位相関係数でも知られています)によって提唱されました。観測可能なテスト結果から、直接観測不可能な「知能」を推定せんとする試みが、後に因子分析として多分野に展開されてきました。

私自身、医薬品のデータ解析に従事する中でこの概念に触れた際、大きな示唆を得るに至りました。例えば、ドラッグリポジショニングや未知の有害事象といった医薬品の未解明な側面、あるいは分子生物学における「パスウェイ」なども、観測不可能な潜在変数として捉えることが可能です。科学の世界や日常生活

には、このように目に見えずとも確かに扱われている概念が数多く存在します。データ駆動型の手法でこれらの潜在変数を抽出する試みは、そうした抽象的な概念を可視化し、情報として「符号化」する重要なプロセスであると考えています。同時に、それらの概念がどのようにして社会的に受け入れられるか?という点についても興味を持っています。

近年の科学技術の著しい進展と実験データの蓄積により、生命科学は新たな局面を迎えてます。「観測から潜在へ」というキーワードを掲げ、今後一層、毒性学研究の発展に貢献できるよう邁進する所存です。



水野 忠快

技術賞を受賞して

アステラス製薬株式会社 久我 和寛

「機械学習と心拍変動解析を用いた薬物誘発性けいれんの予測法の開発」のテーマで技術賞をいただき大変光栄に存じます。選考委員ならびに学会関係の諸先生方に厚く御礼申し上げます。

本研究は藤原幸一先生（現・北海道大学/NAIST、当時名古屋大学）の「心拍変動によるヒトてんかん予知」の研究を拝見し、それを毒性学領域での症撃予測に応用できないかと相談を持ち掛けたことが出発点であり、ヒトでの知見を非臨床に応用するリバーストランスレーショナルリサーチとして取り組んだものです。非臨床の心電図測定は、ほとんどの開発医薬品において実施される、製薬企業の毒性研究者にとって馴染み深い検査です。心拍変動解析も古くから知られる中枢機能の評価手法ですが、今回改めてそこに新しい価値の可能性を見いだせたことは大きな喜びです。AI技術等の発展によって既存の測定法も新たな展開を迎える時代となり、見慣れたデータからこれまで得られなかつた洞察を引き出すことも可能になりつつあります。近年ではスマートウォッチに心電図機能が搭載されるなど、心電図は社会全

体にとっても身近な存在になりました。循環器系の評価を超えて心電図に新たな意味を付与することは、毒性領域のみならず広く社会に貢献できる可能性を秘めていると考えられます。

本研究はまだ道半ばであり、精度の向上をはじめ毒性評価における一般的な実用化に向けた課題は多く残されていますが、将来的には非臨床から臨床まで一貫して活用可能な枠組みへと発展させることを目指しております。最後にこの場を借りて、一連の研究における共同研究者の皆様をはじめ、本研究を支えてくださった多くの方々に心より感謝申し上げます。



久我 和寛

技術賞を受賞して

第一三共株式会社 安全性研究所 浜村 えり

この度は、「イヌ及びヒト MRGPRX2 発現細胞を用いた in vitro アレルギー様反応評価系の開発」につきまして、日本毒性学会技術賞という栄誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。選考委員及び学会関係の諸先生方に厚く御礼申し上げます。

アレルギー様反応は、低分子薬あるいはペプチド薬によって引き起こされる副作用の一つであり、薬剤はマスト細胞上の Mas-related G protein-coupled receptor X2 (MRGPRX2) に直接結合することにより、IgE 非依存的な脱顆粒を引き起こします。MRGPRX2 を介する脱顆粒反応には感受性種差が存在し、イヌではヒトと比較して高感受性であることが知られています。一方、マスト細胞の単離あるいは培養には煩雑かつ高度な技術を必要とし、感受性種差を評価可能な in vitro 系は構築されていませんでした。本研究では、ヒト及びイヌ MRGPRX2 発現細胞を用いた評価系を構築し、その反応性が in vivo 非臨床及び臨床試験の

結果と相関する可能性が示唆されました。これにより、アレルギー様反応で課題であった感受性種差を評価できる可能性が示され、今後、非臨床試験でみられるヒスタミン遊離反応のメカニズム解析及びヒトへの外挿性評価法としての活用が期待されます。

今回の受賞を励みに、今後も毒性学研究に貢献できるよう努める所存です。最後に、本研究を遂行するにあたりご指導ご鞭撻を賜りました森和彦先生及び共同研究者の皆様に心より感謝申し上げます。



浜村 えり

技術賞を受賞して

アステラス製薬株式会社 森 華奈子

この度は、日本毒性学会 2025 年度技術賞という名誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。選考委員の諸先生方に厚く御礼申し上げます。

受賞対象となった胚・胎児発生毒性評価を目的としたゼブラフィッシュ試験法の開発は、本邦では 2021 年 1 月に発出された「医薬品の生殖発生毒性評価に係るガイドライン」において、従来の哺乳類を用いた in vivo 試験以外の試験系が医薬品の製造販売承認申請における発生毒性試験の一部として受け入れ可能となったことを背景に進めてきたものです。この規制改定に合わせ、新しい試験法の必要性が高まる局面で研究を開始できたことは、私にとって恵まれた巡り合わせでした。また、この研究は共同研究として進められ、優れた指導者や協力的な仲間に支えられたことも大きな力となりました。

本研究の価値は、まだ発展途上であると認識しています。製薬企業としては、技術を患者さんにとって

ての価値に変えることが重要です。一つの試験系の性能を見極めつつ、どのような試験法の組み合わせ（バッテリー）がヒトでのリスク評価に資する確かな情報を提供できるかを、今後も考え続けなければなりません。今回の受賞を励みに、この試験法だけでなく、様々な革新的な技術を取り入れながら磨き上げ、生殖発生毒性評価の信頼性向上と医薬品開発の加速に貢献できるよう努めてまいります。改めまして、本研究を支えてくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。



森 華奈子

田邊賞を受賞して

昭和医科大学大学院 薬学研究科 毒物学分野 光本(貝崎)明日香

この度は我々の論文「Paternal methamphetamine exposure differentially affects first and second generations in mice」に対して、栄誉ある田邊賞を賜り、誠に光栄に存じます。

近年、父性の環境因子が子孫に影響を及ぼすという「paternal origins of health and disease (POHad)」理論が注目されています。本論文では世界的に広く乱用されているアンフェタミン型興奮剤であるメタンフェタミン (METH) の父性曝露が次世代 (子) および次々世代 (孫) に及ぼす影響を検討しました。その結果、子では成長遅延と記憶障害、孫では肥満や雌におけるMETH感受性の低下、不安行動の減少が生じること、また、子では行動、孫ではタンパク質フォールディングに関連する遺伝子の濃縮を確認しました。本研究により、METH父性曝露は世代を超えて、世代ごとに異なる形で現れることが明らかになりました。

この成果は薬物乱用防止教育など社会への貢献が期待されます。

最後に、本研究遂行に多大なる努力をした筆頭著者の宗友(青木)咲子さんをはじめ共著の先生方に心より感謝申し上げます。



田邊賞を受賞して

理化学研究所 マルチモーダルAI基盤技術研究チーム 五十嵐芳暢

この度は、私たちの論文「Developing a GNN-based AI model to predict mitochondrial toxicity using the bagging method」に対し、田邊賞という栄えある賞を頂戴し、誠に光栄に存じます。著者一同を代表し、選考委員ならびに学会関係の先生方に心より御礼申し上げます。

本研究は、ミトコンドリア毒性の予測を目的として、グラフニューラルネットワーク (GNN) を活用したAIモデルを開発したものです。ミトコンドリア毒性は多様な薬物誘発性、特に肝毒性の発現に深く関与しており、創薬初期段階での重要な安全性評価指標とされています。化学構造から毒性を予測する場合、従来の方法では毒性の有無の二値分類に留まるものが主流であり、毒性発現に寄与する化学構造部分を可視化することは困難でした。そこで本研究では、化学構造情報を直接学習可能なGNNアプローチを採用し、統合勾配法により毒性発現に関与する部分構造の可視化を実現いたしました。さらに、データセットにおける陽性と陰性データ数の不均衡という課題に対し、バギング法を導入することで、学習の安定化と高精度な予測を両立することができました。本モデルはミトコンドリア毒性の予測だけでなく

く、化学構造的要因の理解にも貢献できると考えております。

本研究が、創薬における安全性評価の精度向上やAIを用いた毒性予測技術の発展に寄与することを願っております。今回の受賞を励みとして、今後も科学的根拠に基づいた信頼性の高い予測モデルの開発に取り組んでまいります。最後に、本研究を支えてくださった共同研究者の皆様、ならびに日頃よりご指導・ご支援を賜っております関係各位に、深く感謝申し上げます。



左より奥野、五十嵐、山田

田邊賞を受賞して

一般財団法人電力中央研究所 吉田 映子

この度は、我々の論文に対して2025年度日本毒性学会田邊賞という栄誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。選考委員及び学会関係者の諸先生方に、共著者を代表いたしまして心から御礼申し上げます。

本論文「Comparative study of susceptibility to methylmercury cytotoxicity in cell types composing rat peripheral nerves: a higher susceptibility of dorsal root ganglion neurons」は、水俣病の初期症状で見られる末梢感覺神経優位な傷害に関する毒性発現機構について検討したものです。末梢神経を構成するcell typeごと（感覺神経の細胞体である後根神経節細胞、運動神経の細胞体である前角細胞、およびシュワン細胞）にメチル水銀に対する感受性を比較し、後根神経節細胞が特にメチル水銀に対して高い感受性を示すことを明らかにいたしました。さらに古典的な機構ではありますが、後根神経節細胞に特異的なメチル水銀毒性の鍵分子としてメチル水銀の取り込み・排泄を担う輸送体LAT-1とMRP-2を見出し、後根神経節細胞における構成的なLAT-1の発現が高くMRP-2の発現が低いことが、メチル水銀による感覺神経特異的な毒性発現に関与する可能性を明らかに

しました。これより、水俣病初期に観察される末梢感覺神経優位な傷害には、感覺神経の細胞体である後根神経節細胞におけるメチル水銀輸送体の発現が関与することが示唆されました。本研究の結果が、メチル水銀による感覺神経特異的な毒性発現に関する研究の一助となれば幸いです。

最後に、本論文は主に東京理科大学薬学部環境健康学研究室で行った研究であり、当時の学部生、修士課程の学生を中心に行なった実験研究成果をまとめたものです。本研究を遂行するにあたり、ご指導ご協力いただきました関係者の皆さまに、この場をお借りして御礼申し上げます。今回の受賞を励みとして、今後も研鑽を重ね、貴学会へ還元できるよう努力したいと思います。



吉田 映子

田邊賞を受賞して

山陽小野田市立山口東京理科大学工学部 小島 肇

この度は、J. Toxicol. Sci., Vol.49, No.8, 337-348, 2024に掲載されました私共の論文“Validation of a new protocol for a zebrafish MEFL (malformation or embryo-fetal lethality) test method that conforms to the ICH S5 (R3) guideline”に対し、田邊賞を授与頂き、誠にありがとうございました。著者を代表して、会員、選考委員および理事の皆様に御礼申し上げます。

ご存じのように、2020年2月18日に最終版が採択されましたICH S5 (R3) guideline “Detection of reproductive and developmental toxicity for human pharmaceuticals”には代替法の利用についての記載はありますが、具体的な試験法名がありません。本問題を懸念し、AMED研究班にて、製薬企業の皆様にご協力頂きながら、セブラフィッシュ受精卵を用

いる代替法のプロトコルを開発してきた成果を論文にまとめました。この論文に記載しましたように、適用範囲内では高い感度と特異度を持った試験法であることが確認できました。生殖発生毒性試験の一つの代替法として、セブラフィッシュ受精卵を用いる試験法が普及し、ICH S5 (R3) ガイドラインに掲載されることを節に願っております。



小島 肇

ファイザー賞を受賞して

横浜薬科大学 三浦 伸彦

この度、我々の論文”Involvement of *Npas2* and *Per2* modifications in zinc-induced acute diurnal toxicity in mice”に対しまして、ファイザー賞という栄誉ある賞を賜り大変光栄に存じます。JTS誌編集委員長の鍛治利幸先生をはじめ、ご査読いただいた先生方ならびに関係各位の諸先生方に、共著者を代表して心より感謝申し上げます。生物は概日リズムを有しています。この概日リズムは生体防御因子をはじめとして様々な生体内因子を量的に変動させることから、我々は異なる時刻に毒物の曝露を受けた場合、毒性の強さが変化する可能性を考え、「時間毒性学」として展開しています。2018年にJTS誌(43, 129-134)で7種類の金属の感受性時刻差が異なることを報告しました。今回の受賞対象論文では、特に亜鉛に焦点を当て、時間毒性に関わる因子の解明を試みました。先ず肝障害(ALT及びAST)について調べたところ、夜中(22時)投与の方が昼(10時)投与に比べて肝障害が強く認められ、過去の致死毒性試験の結果と一致しました。この時に、驚くべきことに肝臓中の亜鉛蓄積量およびメタロチオネインのレベルは両時刻で

差は認められませんでした。Hepal-6細胞での検討では、亜鉛処理によってアポトーシスが認められる条件下で、*Per2*と*Npas2*が減少しました。さらに*Per2*と*Npas2*を過剰発現させると、亜鉛の毒性が消失することを見出しました。亜鉛の蓄積量に差がなかったという結果から、概日リズム



に乗った生体防御系の日内変動が、薬毒物の毒性発現強度という面において考慮すべき因子と考えます。この様に複数の時間軸で検討を行うことで毒性発現機序を含めた新たな発見があることを期待し研究に取り組んでおりまして、これらの解析を通じて今後も微力ながら日本毒性学会の発展に貢献できればと考えております。

ファイザー賞を受賞して

広島大学 石原 康宏

この度、私どもの論文「Involvement of polycyclic aromatic hydrocarbons and endotoxin in macrophage expression of interleukin-33 induced by exposure to particulate matter (The Journal of Toxicological Sciences 47:201-210, 2022)」に対して、栄えあるファイザー賞を賜り、大変光栄に存じます。

本研究は、環境研究総合推進費の支援を受けて2020年から開始した研究です。横浜と福岡で大気中からPM2.5を集めてその作用を調べるものであり、本邦の大気から集めた実PM2.5を用いることが特色の一つでした。しかしながら、コロナ禍による緊急事態宣言により大学への立ち入りが禁止され、また、長く移動制限が課されたことにより、研究は大きく遅れました。およそ1年遅れでサイクロン型捕集機を何とか福岡に設置でき、また少し先んじて横浜での採取も開始されていたことから、計画をその時々

で変更し、右往左往しながら何とか成果発表にこぎつけたものです。発表までのプロセスから忘れることができない論文でありましたが、ファイザー賞の受賞によりさらに印象深い論文となりました。

また再びこのような栄誉ある賞を頂けるよう、研究に邁進します。末筆ですが、本研究に関わって頂いた先生方と大学院生、編集委員長の鍛治利幸先生、ファイザー社の関係者の方々に心より御申し上げます。



石原 康宏

ファイザー賞を受賞して

広島国際大学 薬学部 環境毒物代謝学研究室 平尾 雅代

この度、我々の論文「Perfluorooctanoic acid (PFOA) as a stimulator of estrogen receptor-negative breast cancer MDA-MB-231 cell aggressiveness: Evidence for involvement of fatty acid 2-hydroxylase (FA2H) in the stimulated cell migration: *J. Toxicol. Sci.* 47: 159-168, 2022」に対してファイザー賞という誉れ高き賞を賜り、大変光栄に存じます。著者の一人として、編集委員長の鍛治利幸先生をはじめ、関係者の皆様に心より感謝申しあげます。

近年、ペルフルオロオクタン酸 (PFOA) などの有機フッ素化合物による生体影響が国際的に懸念されています。WHOの国際がん研究機関 (IARC) がPFOAをグループ1（ヒトに対して発がん性がある）に分類したのは記憶に新しいところです。乳がん影響に対するエビデンスは乏しいものの、疫学研究からPFOAの曝露がエストロゲン受容体 α (ER α) 隣性乳がんの発症リスクを高めることが示唆されています。しかし、その分子機構は十分に解明されていません。我々はこれまでに、脂肪酸2位水酸化酵素 (fatty acid 2-hydroxylase; FA2H) が乳がん細胞遊走の正の調節因子として機能することを発見し、FA2Hの発現制御機構の解明研究を行ってきました。本研究では、PFOAの構造が脂肪酸に類似していることに注目しました。ER α 隣性乳がん細胞において、PFOAがペルオキシソーム増殖薬活性化受容体 α (PPAR α) の転写活性化を介してFA2Hの発現を誘導し、誘導されたFA2H依存的に細胞遊

走を促進することを明らかにしました。さらに、通常、PPAR α の機能は共存するPPAR β/δ により負に調節されていますが、PFOAはPPAR β/δ によるPPAR α の抑制を解除することが示されました。本研究成果がPFOAによるER α を介さない乳がん（細胞）の悪性化機構の解明の一助となれば幸いです。今後も、微力ながら毒性学の発展に貢献できるよう努めてまいります。

最後になりますが、日頃よりご指導・ご鞭撻を賜りました福山大学薬学部・大学院薬学研究科の竹田修三先生（右写真）に深く感謝申し上げます。また、本研究にご協力くださいました関係者の皆様にも厚く御礼申し上げます。



（写真）左：平尾 雅代、右：竹田 修三

日本毒性学会教育委員会からのお知らせ（第6報）

教育委員会の各種事業は下記の要領で実施する予定です。詳細は決まり次第、学会ホームページおよび毒性学ニュースでお知らせします。

なお、学会主催講習会は、トキシコロジーに関する知識（基礎知識）を幅広く学習する基礎教育講習会とトキシコロジストとしての知識をアップデート・ブラッシュアップする生涯教育講習会として位置付けすることを基本方針として開催いたします。

「第28回日本毒性学会基礎教育講習会」

本講習会はトキシコロジストの系統的な基礎教育あるいは再教育を目的としております。また、トキシコロジー全般にわたる理解を深めたうえで、日本毒性学会認定トキシコロジスト認定試験受験にお役立て下さい。講習は動画配信形式で行います。

1. 日 時

2026年3月31日（火）まで

2. 形 式

オンデマンド動画配信

3. 申 込

個人契約：終了しました。

団体契約：通年受付しております。

※学会ホームページ内、基礎教育講習会ページより、
お申込みください。

4. 受講料

団体契約：25,000円

*領収書につきましては、参加証と一緒に送付いたします。宛名のご指定がある場合は、申込時に入力下さい。

*ダウンロード映像、資料の二次利用は固くお断りいたします。

【団体契約について】

同一企業あるいは団体に所属する複数名が同時に受講する場合にお申込み下さい。

本契約での動画視聴は、団体内での体系的な毒性学教育目的（新人／キャリア研修など）や大学等の教育機関での利用を想定しています。団体契約は代表者個人（毒性学会会員に限る）が申し込み、年間（年度）視聴権を得ます。代表者同席のもと複数人が同時視聴することを認めます（研修や講義のサポート教材としての利用を想定）。

※本契約で受講された場合は、受講証明書は発行されません。

認定トキシコロジスト試験 受験・更新資格のための評点として加算されませんので、ご注意ください。

「第29回日本毒性学会認定トキシコロジスト認定試験」

我が国の安全性試験の信頼性向上とトキシコロジーの進歩に寄与するため、質の高い専門家を認定するための試験です。受験資格の詳細については、毒性学ニュース及び学会ホームページの『一般社団法人日本毒性学会認定トキシコロジストの認定制度規程』をご覧ください。日本語・英語いずれかの受験になります。英語受験を希望する場合は、願書の英語受験希望欄にチェックを入れてください。

1. スケジュール（予定）

2026年11月

2. 会 場（予定）

現地開催

専修大学 神田キャンパス
(東京都千代田区神田神保町3-8)

3. 受験料

30,000円

「2026 年度認定トキシコロジスト資格の更新」

2001 年、2006 年、2011 年、2016 年、2021 年に認定トキシコロジストに認定された方となります。

詳細は 2026 年 3 月頃にメールをお送りいたしますのでご確認ください。

毒性学ニュース、学会ホームページの『一般社団法人日本毒性学会認定トキシコロジストの認定資格更新に関する細則』をご覧ください。

「2026 年度 認定トキシコロジスト試験問題作成依頼について」

資格更新のための試験問題作成の依頼は 2026 年 7 月上旬、締め切りは 8 月中旬を予定しています。

その他、詳細につきましては、2026 年 6 月頃にご案内いたします。

第 28 回日本毒性学会認定トキシコロジスト 認定試験合格者

第 28 回認定トキシコロジスト認定試験が 2025 年 11 月 9 日に専修大学 神田キャンパスにて行われました。その結果、以下の 29 名が所定の書類審査に合格し、200 間の試験において 140 点以上を得点され、新たに認定トキシコロジストと認められました。

おめでとうございます。

なお、受験者の総数は 73 名でした。

石田 南人	佐藤 一樹	三原 大輝
井本 大瑚	杉本 航	宮崎 真悟
内田 景子	角田 将朗	村田 幸咲
衛藤 舜一	瀧本 憲史	村山 宗理
大澤 優生	田中 美咲	森下 裕貴
岡本健太郎	谷口 宗	山田 理愛
小澤 俊介	中川 南海	山田康太郎
金子有希子	沼倉 佑樹	山室 友紀
菊川 奈保	野田 沙樹	吉野 有香
古賀 遥	藤本 重行	

(五十音順 敬称略)

2025 年 11 月 26 日

一般社団法人日本毒性学会

理事長 広瀬 明彦
教育委員会委員長 土屋 由美
認定試験小委員会委員長 福島 民雄

第52回日本毒性学会学術年会要旨集の販売について

第52回日本毒性学会学術年会の要旨集（日本語版または英語版）を3,500円（税・送料込）で販売します。ご希望の方は郵便局に備付けの郵便振替用紙に必要事項をご記入の上、下記口座までお振り込み下さい。ご納入確認後、要旨集を発送致します。

なお、学術年会（第32回以降）の要旨はオンライン（J-STAGE）でも閲覧が可能です。

振込先：口座番号	00150-9-426831
加入者名	一般社団法人日本毒性学会
要旨集価格	3,500円（日本語版または英語版各1部）

通信欄記入事項：①住所②氏名（団体の場合は機関名・部署等）③電話番号
④第52回学術年会要旨集希望の旨（記入例：日本語版1部希望）

※通信欄のご記入住所へ送付いたします。詳細なご記入をお願いいたします。

問い合わせ先：一般社団法人日本毒性学会
〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
パレスサイドビル
(株)毎日学術フォーラム
TEL: 03-6267-4550 FAX: 03-6267-4555
E-mail: jsothq@jsot.jp

第53回日本毒性学会学術年会のご案内（第3報）

（年会ホームページ：<https://www.jsot2026.jp/>）

1. 会期

2026年7月1日（水）～3日（金）

2. 会場

グランキューブ大阪（大阪府立国際会議場）

〒530-0005 大阪市北区中之島5丁目3-51

TEL：06-4803-5555

URL：<https://www.gco.co.jp/>

3. テーマ

Evolving Toxicology

—多彩な学識の交差点から生まれる知の革新

Innovation Emerging from the Confluence of Diverse Fields

4. 年会長

宮脇 出

（住友ファーマ株式会社）

5. 企画委員（敬称略・五十音順）

上原 孝（岡山大学）

諫田 泰成（国立医薬品食品衛生研究所）

北嶋 聰（国立医薬品食品衛生研究所）

栗林 正伯（小野薬品工業（株））

佐藤 雅彦（愛知学院大学）

篠澤 忠絃（武田薬品工業（株））

鈴木 瞳（協和キリン（株））

高橋 祐次（国立医薬品食品衛生研究所）

田口 恵子（東京大学）

角崎 英志（（株）新日本科学）

奈良岡 準（アステラス製薬（株））

中島 美紀（金沢大学）

中西 剛（岐阜薬科大学）

南谷賢一郎（協和キリン（株））

西村 有平（三重大学）

黄 基旭（東北医科大学）

福島 民雄（塙野義製薬（株））

古川 賢（日産化学（株））

本多 正樹（中外製薬（株））

三ヶ島史人（医薬品医療機器総合機構）

水野 忠快（東京大学）

山本 千夏（東邦大学）

吉成 浩一（静岡県立大学）

6. 特別企画（予定、仮題、敬称略、順不同）

1) 第23回市民公開セミナー

日 時：2026年7月4日（土）10:30～12:00

会 場：梅田スカイビル 36F「スカイルーム1」

2) 年会長招待講演

「免疫・感染症研究の醍醐味とその社会実装について」

熊ノ郷 淳（国立大学法人大阪大学）

3) 特別講演

・「グリア細胞からみたドバミン神経毒性と神経保護」
　　浅沼 幹人（岡山大学）

・「腸内細菌叢の病態との関わりについて」
　　内藤 裕二（京都府立医科大学）

4) 教育講演

・「毒性学の役割 難しさと面白さ」
　　菅野 純（国立医薬品食品衛生研究所）

・「Personal perspectives on the FDA roadmap for the New Alternative Methodologies (NAMs) for nonclinical safety and efficacy assessment during drug development」
　　Saryu Goel (Former FDA reviewer)

5) シンポジウム

・アデノ随伴ウィルスベクター製品の安全性評価の考え方

・新奇な代謝反応が関わる医薬品毒性研究の最前線

・学術小委員会：次世代研究セミナー

・学術小委員会：キャリア形成支援プログラム

・Cutting-edge *in silico* - 毒性領域への応用

・免疫介在性肝障害研究の現在地

・【日本中毒学会合同シンポジウム】子どもの中毒学・毒性学

・Utilization of DDT/NAMs in Pharmaceutical Development in Japan: Current Status and Challenges

・アカデミア・企業におけるデータインテグリティ（DI）最前線

- ・フォワード／リバーストランスレーションナルリサーチによる医薬品安全性研究の実践【第2章】～製薬企業の挑戦と進化～
- ・生体金属に関連した毒性学研究の最新動向
- ・【KSOT-JSOT Joint Symposium】
New developments in safety assessment using New Approached Methodologies (NAMs)
- ・新モダリティの生殖発生毒性評価
- ・新薬における非臨床安全性パッケージとそのプロファイル
- ・付加体を形成する化学物質による生体および環境影響
- ・システム毒性学とセレンディピティ
- ・非侵襲的手法を用いた *in vivo* 毒性評価の現状
- ・我が国におけるPFAS研究：現状と課題
- ・マイクロプラスチック研究に関する日化協の取り組み
- ・毒性試験における実験動物としての小型魚類（ゼブラフィッシュ／メダカ）の有用性
- ・Non-clinical development of gene therapy and its toxicity to be considered
- ・毒性マーカーとしての纖毛の可能性
- ・PFASの毒性学に寄与する多様な研究
- ・リアルワールドデータ×人工知能で切り拓く次世代ファーマコビジランス
- ・毒性をかたちづくる化学的・生物学的スイッチ
- ・新たな計測技術とデータサイエンスが切り開く毒性学の可能性
- ・小児用医薬品の安全性確保に向けた非臨床評価法の開発
- ・【HESI Joint Symposium】Global Trends in NAMs Toward Regulatory Acceptance
- ・【SOT-JSOT Joint Symposium】Advances in Hepatotoxicity Research
- ・【日本内分泌搅乱物質学会合同シンポジウム】子どもの毒性学－脳の可塑性の根幹事象としてのシナプス刈り込み（synaptic pruning）の分子機序と実影響
- ・製薬企業におけるFDA Modernization Act 2.0/3.0に対する取り組み
- ・抗体医薬品やニューモダリティ類の不純物評価と管理
- ・Emerging Safety Biomarker Qualification Strategies Towards Regulatory Acceptance
- ・バイオ医薬品の免疫原性評価の現状と将来展望

- ・【日本毒性病理学会合同シンポジウム】病理学的知見を活かした毒性評価の考え方
- ・NAMsによる全身毒性評価の最前線
- ・【日本薬物動態学会合同シンポジウム】毒性に貢献する薬物動態研究
- ・環境毒性学の次世代 NAMs：分子からシステムへ
- ・アジア招待企画

6) ワークショップ

- ・毒性評価者の育成課題－動物使用経験の欠如が引き起こし得る問題
- ・創薬毒性研究におけるデジタル技術活用～世の中のナレッジを新たな創薬に活かす～
- ・急性毒性試験の再定義：死亡に依存しない評価系の構築とその可能性
- ・安全性薬理研究としての未来
- ・医薬品開発における精巣毒性評価
- ・毒性質問箱：短期間の反復投与毒性試験では見逃される毒性の実例とその影響
- ・医薬品開発における薬物依存性評価の最前線と展望
- ・若手企画ワークショップ1, 2：産官学若手研究者をつなぐキャリアの橋 一学生だった私、研究者になった私一

7. 一般演題募集

- 1) 一般演題（口演およびポスターでの発表）を2026年1月21日（水）から受け付ける予定です。主発表者（プレゼンター）は本学会会員に限りますので非会員の方は、日本毒性学会事務局にて入会の手続きをお願いします。
日本毒性学会ホームページ：<https://www.jsot.jp>
なお、ポスターとスライド作成は、原則英語となります。（口頭発表及び討論は日本語で構いません。英語による発表・議論も可です）
- 2) 演題登録はインターネットを利用したオンライン登録のみです。下記8に記載する「演題登録要領」を参照の上、年会ホームページから登録して下さい。
演題申込開始日：
2026年1月21日（水）（予定）
演題申込締切日：
2026年3月4日（水）（予定）

3) 一般演題は口演またはポスター発表とします。
口演発表につきましては、発表と討論の時間を合わせて 10 ~ 15 分程度を予定しています。詳細は、演題申込数を考慮の上、決まり次第主発表者へ E-mail にてお知らせいたしますので、ホームページなどで隨時ご確認下さい。発表方法は液晶プロジェクターのみです。ポスター発表は、毎日貼替えでポスター展示を行い、途中に質疑応答時間を設けます。

4) 優秀研究発表賞応募演題

2026 年 3 月 31 日時点で 40 歳以下の方を対象として候補者を募集します。

応募者は演題申込時にその旨登録して下さい。応募者はポスター発表に加え、別会場で口頭発表と質疑応答を第 1 日目 (7 月 1 日 (水)) に行っていただきます。受賞者の発表は第 2 日目、授賞式は第 3 日目に行う予定です。受賞者には、賞状と副賞を授与します。

5) 学生ポスター発表賞応募演題

学術年会 (2026 年 7 月 1 日 (水)) の時点で学生 (大学院生を含む。ただし社会人大学院生は除く。) のポスター発表 (筆頭著者) の方を対象とします。

応募者は演題申込時にその旨登録して下さい。審査はポスター発表内容のみで行います。対象のポスターは第 1 日目 (7 月 1 日 (水)) に掲示し、受賞者の発表は第 2 日目、授賞式は第 3 日目に行う予定です。受賞者には、賞状と副賞を授与します。

※上記、4), 5) の賞への重複申請は不可とします。

8. 演題登録要領

演題登録はインターネットを利用したオンライン登録のみです。締め切り間際はアクセス集中によりサーバー処理能力が極端に低下します。そのため、登録に時間を要する、あるいは登録が完了できないといった事態が生じることが予測されますので、演題募集要領と年会ホームページを熟読した上で、余裕をもって登録して下さい。

◆登録方法ならびに登録確認・修正◆

年会ホームページにアクセスし、演題募集のメニューより案内に従って、次の流れのよう登録を進めて下さい。なお、演題登録は発表者本人が行って下さい。
発表者個人情報登録→一般演題登録→共著者・演題情報登録→登録内容確認→登録完了

1) 発表者個人情報登録

発表者は本学会会員に限ります。登録には会員番号 (5 桁) が必要です。

パスワード (半角英数) は登録内容の確認や変更を行うときに使用します。4 文字以上 10 文字以内で入力して下さい。なお、パスワードはメニューページの「パスワードを変更する」より変更することができます。入力したパスワードは各自で大切に記録・保管して下さい。

2) 共著者・演題情報登録

2-1) 共著者情報登録

共著者の氏名・所属を入力して下さい。

共著者数は最大 20 名、所属機関名は最大 15 施設まで登録可能です。

2-2) 演題カテゴリー登録

詳細については、年会ホームページにて追ってご案内いたします。

2-3) 発表形式

発表形式を「口演」、「ポスター」、「どちらでも可」の中から選択して下さい。優秀研究発表賞もしくは学生ポスター発表賞に応募する場合は「ポスター」を選択して下さい。

優秀研究発表賞もしくは学生ポスター発表賞への応募の有無を選択して下さい。

2-4) 演題名

文字数について、登録ページの入力欄には、文字数制限がありません。下記を目処にお願いします。

日本語演題名 文字数：

最大全角 80 文字 (スペース含め)

英語演題名 文字数：

最大半角 200 文字 (スペース含め)

なお、演題名に特殊文字／上付き／下付き／ボールド／イタリックなどの文字を含む場合には、下記ページの HTML タグを使用し、

入力をして下さい。

ただし、このHTMLタグは、上記文字数にはカウントしません。

〈タグ一覧 / 特殊文字一覧 / よく使用する特殊文字ページ〉
http://www.senkyo.co.jp/tag/ja/tag_list.html

2-5) 要旨作成要領

日本語及び英語の要旨のご提出をお願いしております。本文の文字数は、日本語：全角として800字以内、英語：半角として800～1600字以内（スペース含む）です。
英語要旨は半角800字以上でご登録下さい。800字未満の場合はエラーとなります。
また、上記文字数を超えると登録できませんので、ご注意下さい。本文中に演題名・所属・氏名・図表等を入れないで下さい。

2-6) 利益相反

年会ホームページの演題募集のページにてCOI規程をご確認の上、演題登録時にCOIの有無を選択して下さい。

3) 登録内容確認・修正

登録の最後に登録情報の確認画面が表示されますので、内容を確認・修正して下さい。後日改めて確認・修正を行う場合は、登録時に入力したパスワードを用いて確認・修正画面を表示させることができます。

4) 登録完了

登録が完了すると演題登録番号が表示されます。登録したメールアドレス宛てに演題登録完了メールが送信されますので確認して下さい。翌日まで経過してもメールが届かない場合は事務局までご連絡下さい。

9. 参加登録および参加費

事前参加申込開始日：

2026年1月21日（水）（予定）

事前参加申込締切日：

2026年5月15日（金）（予定）

1) 参加費

※学会会員の参加費は「不課税」、関連学会会員、非会員の参加費と情報交換会費は「課税（消費税込）」となります。

カテゴリー	事前参加登録	当日参加登録
会員	15,000円	20,000円
学生会員	5,000円	5,000円
関連学会会員 ^{*1}	15,000円	20,000円
非会員	20,000円	25,000円
情報交換会費（一般）	10,000円	15,000円
情報交換会費（学生）	5,000円	5,000円

^{*1} 次の学会会員の方を予定しています。（協賛学会50音順）
 共催：日本中毒学会

日本毒性病理学会

日本免疫毒性学会

日本薬理学会

米国SOT（Society of Toxicology）

韓国毒性学会（Korean Society of Toxicology）

協賛：日本安全性試験受託研究機関協議会

安全性評価研究会

日本安全性薬理研究会

日本医薬品情報学会

日本衛生学会

日本環境毒性学会

日本環境変異原ゲノム学会

日本産業衛生学会

日本実験動物学会

日本獣医学会

日本食品衛生学会

日本食品化学学会

日本先天異常学会

日本動物実験代替法学会

日本内分泌搅乱物質学会（環境ホルモン学会）

日本薬学会

日本薬物動態学会

比較眼科学会

2) お支払い方法

・クレジットカード

※決済等の詳細については、年会ホームページにて追ってご案内いたします。

10. 情報交換会

以下の通り情報交換会を開催する予定です。是非ご参加下さい。

日程：2026年7月2日（木）18:30～（予定）

会場：リーガロイヤルホテル大阪

URL：<https://www.rihga.co.jp/osaka>

詳細は年会ホームページにてご案内いたします。

11. 展示、ランチョンセミナーなどの募集

展示、ランチョンセミナー、広告掲載を募集しております。詳細については年会ホームページをご覧下さい。

12. 託児室

本年会では、参加者が無料で利用できる託児室を設ける予定です。

詳細は年会ホームページにてご案内いたします。

13. 年会事務局

〒554-0022 大阪市此花区春日出中3-1-98

住友ファーマ株式会社 前臨床研究ユニット

事務局長：臼井 亨（住友ファーマ株式会社）

事務局：宮内 慎（株式会社ファイントゥディ）

近藤 美和（住友化学株式会社）

E-mail: secretariat@jsot2026.jp

2026年度日本毒性学会 特別賞 候補者推薦要領

社会における毒性学の認知度の向上、発展、充実に大きく貢献した非会員の研究者に日本毒性学会特別賞を授与する。

候補者の資格：日本毒性学会非会員

推薦者の資格：日本毒性学会理事

表 彰：授賞者数は毎年、最大1名とし、賞状および副賞を授与する。授賞式は当該年度の日本毒性学会学術年会の総会終了後に行う。

受賞講演：受賞者（あるいは代理人）は当該年度の日本毒性学会学術年会にて受賞講演を行う。

候補者の推薦：理事1名の推薦を必要とする。推薦者は、受賞候補者に関する下記事項を所定用紙に記入し、日本毒性学会理事長宛（事務局）に電子メールで提出する。なお、所定用紙（Word ファイル）は日本毒性学会ホームページ（<https://www.jsot.jp/award/special.html>）からダウンロードして使用すること。

- ・推薦書（候補者氏名、授賞タイトルを所定の用紙に記入したもの）
- ・推薦理由（1,000字以内）
- ・特別賞の対象となる業績目録：原著論文、総説・著書、学会主催、発表等

推薦書類の送付先：jsothq@jsot.jp（日本毒性学会事務局）

推薦締切：2025年12月31日（水）

2026年度日本毒性学会 学会賞 候補者推薦要領

毒性学に関連する顕著な研究業績をあげ、かつ日本毒性学会の発展充実に大きく貢献した本会会員に日本毒性学会学会賞を授与する。

候補者の資格：現に 10 年以上継続して日本毒性学会の会員であり、授賞年度の 4 月 1 日に満 65 歳以下である者。ただし、推薦される研究課題で既に他学会等の賞を受けている者は対象とならない。

推薦者の資格：日本毒性学会評議員

表 彰：授賞者数は毎年 1 名とし、賞状および副賞を授与する。授賞式は当該年度の日本毒性学会学術年会の総会終了後に行う。

受賞講演：受賞者は当該年度の日本毒性学会学術年会にて受賞講演を行う。

候補者の推薦：評議員 1 名の推薦を必要とする。推薦者は、受賞候補者に関する下記事項を所定用紙に記入し、日本毒性学会理事長宛（事務局）に電子メールで提出する。なお、所定用紙（Word ファイル）は日本毒性学会ホームページ (<https://www.jsot.jp/award/index.html>) からダウンロードして使用すること。

- ・推薦書（候補者氏名、略歴、会員歴等を所定の用紙に記入したもの）
- ・推薦理由（2,000 字以内）
- ・学会賞の対象となる業績目録：原著論文（J. Toxicol. Sci. または Fundam. Toxicol. Sci. 掲載論文に丸印を付ける）、総説・著書
- ・過去 5 年間に日本毒性学会学術年会で発表した一般演題リスト（共同著者の演題を含む）

推薦書類の送付先：jsothq@jsot.jp
(日本毒性学会事務局)

推薦締切：2025 年 12 月 31 日（水）

2026年度日本毒性学会 佐藤哲男賞（国際貢献賞） 候補者推薦要領

毒性学に関連する顕著な研究業績をあげ、かつ日本毒性学会の発展充実に大きく貢献した本会会員に日本毒性学会佐藤哲男賞（国際貢献賞）を授与する。

候補者の資格：現に 10 年以上継続して日本毒性学会の会員であるもの。ただし、推薦される研究課題で既に他学会等の賞を受けているものは対象となるない。

推薦者の資格：日本毒性学会評議員

表 彰：授賞者数は毎年、最大 1 名とし、賞状および副賞を授与する。授賞式は当該年度の日本毒性学会学術年会の総会終了後に行う。

受賞講演：受賞者（あるいは代理人）は当該年度の日本毒性学会学術年会にて受賞講演を行う。

候補者の推薦：評議員 1 名の推薦を必要とする。推薦者は、受賞候補者に関する下記事項を所定用紙に記入し、日本毒性学会理事長宛（事務局）に電子メールで提出する。なお、所定用紙（Word ファイル）は日本毒性学会ホームページ（<https://www.jsot.jp/award/satou.html>）からダウンロードして使用すること。

- ・推薦書（候補者氏名、授賞タイトルを所定の用紙に記入したもの）
- ・推薦理由（1,000 字以内）
- ・佐藤哲男賞（国際貢献賞）の対象となる業績目録：原著論文、総説・著書、学会主催、発表等

推薦書類の送付先：jsothq@jsot.jp

（日本毒性学会事務局）

推薦締切：2025 年 12 月 31 日（水）

2026年度日本毒性学会 学会貢献賞 候補者推薦要領

本会における学会活動の貢献に敬意を表し、日本毒性学会の発展充実に大きく貢献した本会会員に授与する。

候補者の資格：現に 20 年以上継続して日本毒性学会の会員である者。

推薦者の資格：日本毒性学会評議員

表 彰：授賞者数は毎年 1 名とし、賞状および副賞を授与する。授賞式は当該年度の日本毒性学会学術年会の総会終了後に行う。

候補者の推薦：評議員 1 名の推薦を必要とする。推薦者は、受賞候補者に関する下記事項を所定用紙に記入し、日本毒性学会理事長宛（事務局）に電子メールで提出する。なお、所定用紙（Word ファイル）は日本毒性学会ホームページ (<https://www.jsot.jp/award/academic.html>) からダウンロードして使用すること。

- ・推薦書（候補者氏名、略歴、会員歴、本会における委員等の職歴等を所定の用紙に記入したもの）
- ・推薦理由（2,000 字以内）
- ・学会貢献賞の対象となる業績目録：学会の活動に貢献した具体的な業績

推薦書類の送付先：jsothq@jsot.jp
(日本毒性学会事務局)
推薦締切：2025 年 12 月 31 日（水）

2026年度日本毒性学会 奨励賞 候補者推薦要領

毒性学に関する研究において独創的な研究業績をあげつつあり、将来が期待される本会会員に日本毒性学会奨励賞を授与する。

候補者の資格：現に3年以上継続して日本毒性学会の会員であり、授賞年度の4月1日に満40歳以下である者。ただし、推薦される研究課題で既に他学会等の賞を受けている者は対象とならない。

推薦者の資格：日本毒性学会評議員

表 彰：授賞者数は毎年3名以内とし、賞状および副賞を授与する。授賞式は当該年度の日本毒性学会学術年会の総会終了後に行う。

受賞講演：受賞者は当該年度の日本毒性学会学術年会にて受賞講演を行う。

候補者の推薦：評議員1名の推薦を必要とする。推薦者は、受賞候補者に関する下記事項を所定用紙に記入し、日本毒性学会理事長宛（事務局）に電子メールで提出する。なお、所定用紙（Word ファイル）は日本毒性学会ホームページ（<https://www.jsot.jp/award/encourage.html>）からダウンロードして使用すること。

- ・推薦書（候補者氏名、略歴、会員歴等を所定の用紙に記入したもの）
- ・推薦理由（2000字以内）
- ・奨励賞の対象となる業績の目録：原著論文（J. Toxicol. Sci. または Fundam. Toxicol. Sci. 掲載論文に丸印を付ける）、総説・著書
- ・過去3年間に日本毒性学会学術年会で発表した一般演題リスト（共同著者となっている演題を含む）

推薦書類の送付先：jsothq@jsot.jp
(日本毒性学会事務局)

推薦締切：2025年12月31日（水）

その他のお知らせ

日本安全性薬理研究会 第17回学術年会のご案内

詳細は本会ホームページ：<https://www.astem-co.co.jp/jsp2025/index.html>をご参照下さい。

学術年会長：白川 誉史（アステラス製薬株式会社）
会 期：2026年2月26日（木）、27日（金）
会 場：ソニックスティ 小ホール及び国際会議場
〒330-8669 埼玉県さいたま市大宮区桜木町1-7-2
JR大宮駅より約3分

参加申込（事前参加申込のみ）：
参加費：10,000円（一般）、1,000円（学生）
参加申込期間：2025年11月13日（木）～2026年2月12日（木）

一般演題（ポスター発表、Flash talk 及び優秀研究発表賞） 募集

参加申込期間：2025年11月13日（木）～2025年12月25日（木）
ポスター発表演者の中から、優秀発表賞受賞者を選出し、2日
目閉会時に表彰します。多数のお申込みをお待ちしております。

懇親会：
開催日時：開催日時：2024年2月26日（木）18:30～20:30
会 場：ソニックスティ 市民ホール
参 加 費：6,000円
(学術年会に参加される方は、参加登録と同時に申込が必要です。)
参加申込期間：2025年11月13日（木）～2026年2月12日（木）

プログラム（案）：
テーマ：「安全性薬理の未来を切り拓く - 臨床予測の限界打破 -」

1. シンポジウムⅠ：中枢神経評価における新規技術の活用
2. シンポジウムⅡ：(仮) 循環器評価における新規技術の活用
3. ケーススタディ：心血管系リスク評価の最新適用事例
規制当局視点に学ぶ
4. ワークショップ：パネルディスカッション
5. 海外招待講演
6. 教育講演
7. ランチョンセミナー
8. 一般演題（ポスター発表、Flash talk、優秀発表賞）
9. 企業展示（展示ブース、Flash talk）

その他：本研究会の学術年会への参加は、日本毒性学会認定トキシコロジストの受験資格および認定資格更新の評点（5点）になります

以上

毒性学ニュース索引（50巻）

毒性学ニュース索引 (50巻)

日本毒性学会からのお知らせ

第52回日本毒性学会学術年会のご案内 (第4報)	No. 1	1
第52回日本毒性学会学術年会のご案内 (第5報)	No. 2	15
第52回日本毒性学会学術年会のご案内 (第6報)	No. 3	33
第53回日本毒性学会学術年会のご案内 (第1報)	No. 4	48
第53回日本毒性学会学術年会のご案内 (第2報)	No. 5	77
第53回日本毒性学会学術年会のご案内 (第3報)	No. 6	106
2024年～2026年日本毒性学会理事監事および各種委員会委員長について	No. 5	57
2025年度一般社団法人日本毒性学会評議員会・社員総会報告	No. 5	58
2025年度特別賞・学会賞・佐藤哲男賞(国際貢献賞)・奨励賞・技術賞受賞者一覧	No. 6	90
2025年度年会費納人のお願い	No. 2	14 / No. 3 32
2026年度日本毒性学会学会賞候補者推薦要領	No. 4	49 / No. 5 80 / No. 6 112
2026年度日本毒性学会特別賞候補者推薦要領	No. 4	50 / No. 5 79 / No. 6 111
2026年度日本毒性学会佐藤哲男賞(国際貢献賞)候補者推薦要領	No. 4	51 / No. 5 81 / No. 6 113
2026年度日本毒性学会学会貢献賞候補者推薦要領	No. 4	52 / No. 5 82 / No. 6 114
2026年度日本毒性学会奨励賞候補者推薦要領	No. 4	53 / No. 5 83 / No. 6 115
社員総会開催のご案内と出欠票(委任状)提出のお願い	No. 1	11 / No. 2 13 / No. 3 31
第28回日本毒性学会認定トキシコロジスト認定試験	No. 3	39 / No. 4 47
第28回日本毒性学会認定トキシコロジスト認定試験合格者	No. 6	104
第51回日本毒性学会学術年会要旨集の販売について	No. 1	10 / No. 2 23 / No. 3 42
第52回日本毒性学会学術年会報告	No. 5	74
第52回日本毒性学会学術年会要旨集の販売について	No. 4	54 / No. 5 76 / No. 6 105
日本毒性学会教育委員会からのお知らせ(第1報)	No. 1	7
日本毒性学会教育委員会からのお知らせ(第2報)	No. 2	20
日本毒性学会教育委員会からのお知らせ(第3報)	No. 3	37
日本毒性学会教育委員会からのお知らせ(第4報)	No. 4	45
日本毒性学会教育委員会からのお知らせ(第5報)	No. 5	84
日本毒性学会教育委員会からのお知らせ(第6報)	No. 6	102
前川昭彦先生追悼文	No. 1	1
苗代一郎博士追悼文	No. 5	56
理事・監事候補者の選挙について	No. 6	89
米国毒性学会(SOT)教育コースへの派遣者公募	No. 5	86
Society of Toxicology(SOT)学術年会派遣報告①	No. 3	40
Society of Toxicology(SOT)学術年会派遣報告②	No. 3	41
「学会賞を受賞して」 北嶋 聰	No. 6	94
「奨励賞を受賞して」 石田 慶士	No. 6	95
「奨励賞を受賞して」 東阪 和馬	No. 6	95
「奨励賞を受賞して」 水野 忠快	No. 6	96
「技術賞を受賞して」 久我 和寛	No. 6	96
「技術賞を受賞して」 森 華奈子	No. 6	97
「技術賞を受賞して」 浜村 えり	No. 6	97
「田邊賞を受賞して」 五十嵐芳暢	No. 6	98
「田邊賞を受賞して」 光本(貝崎)明日香	No. 6	98
「田邊賞を受賞して」 吉田 映子	No. 6	99
「田邊賞を受賞して」 小島 肇	No. 6	99
「ファイザー賞を受賞して」 三浦 伸彦	No. 6	100
「ファイザー賞を受賞して」 石原 康宏	No. 6	100
「ファイザー賞を受賞して」 平尾 雅代	No. 6	101

オピニオン

衛藤光明氏の自著に対する反論に答える	No. 2	24
毒性学ニュース「オピニオン」に掲載された高岡氏へ提言	No. 3	43

その他のお知らせ

製薬協主催オンラインセミナーシリーズ開催案内	No. 5	88
第65回日本先天異常学会学術集会案内	No. 3	44
第32回日本免疫毒性学会学術年会	No. 4	55
第36回日本微量元素学会学術集会のご案内	No. 4	55
日本安全性薬理研究会第17回学術年会のご案内	No. 6	116

一般社団法人日本毒性学会の定款および規程類について

日本毒性学会の定款および規程類については、最新版が学会ホームページ（http://www.jsot.jp/about/rule_list.html）に掲載されています。

2022年9月2日付で「研究倫理要綱」と「研究倫理問題に関する規程」が新たに制定されました。学会ホームページでご確認をお願いします。

一般社団法人日本毒性学会 定款

一般社団法人日本毒性学会 研究倫理要綱

一般社団法人日本毒性学会 研究倫理問題に関する規程

一般社団法人日本毒性学会 動物実験に関する指針

一般社団法人日本毒性学会 入会規程

一般社団法人日本毒性学会 賛助会員に関する規程

一般社団法人日本毒性学会 名誉会員・功労会員推薦規程

一般社団法人日本毒性学会 評議員選出規程

一般社団法人日本毒性学会 理事・監事選出規程

一般社団法人日本毒性学会 理事および監事候補の選出に関する細則

一般社団法人日本毒性学会 常置委員会共通規程

一般社団法人日本毒性学会 部会に関する規程

J. Toxicol. Sci. 投稿規程

Fundam. Toxicol. Sci. 投稿規程

一般社団法人日本毒性学会 学会賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 特別賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 佐藤哲男賞（国際貢献賞）選考規程

一般社団法人日本毒性学会 学会貢献賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 奨励賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 技術賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 田邊賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 ファイザー賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 日化協 LRI 賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 認定トキシコロジストの認定制度規程

一般社団法人日本毒性学会 認定トキシコロジストの資格更新に関する細則

一般社団法人日本毒性学会 名誉トキシコロジスト表彰に関する細則

一般社団法人日本毒性学会 米国毒性学会教育コースへの学会員派遣に関する規程

一般社団法人 日本毒性学会 個人情報の適正な管理・利用等に関する基本方針

rash2 マウス

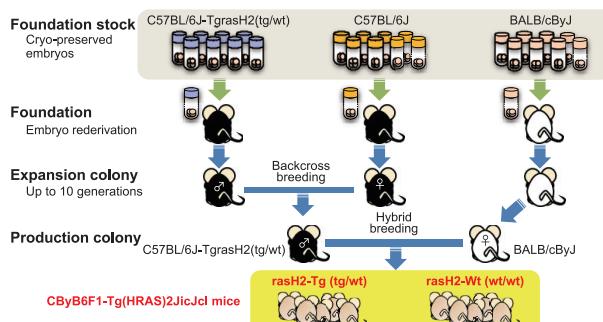


rash2マウスは(公財)実中研、東海大学医学部、国立がんセンター研究所(当時)との共同研究により開発されました。(Saitoh A. et. al., *Oncogene*. 1990)。その後1993年に実中研で発がん性評価試験の実用化を開始、1997年から2001年の5年間における日米欧の産官学50施設の国際共同研究(ILSI/HESI)によってrash2マウスの高いがん性評価の再現性、安定性が証明されました。当社では、2001年より本格的生産・供給をしております。

2024年現在、遺伝子改変マウスによる短期発がん性試験のスタンダードモデルとして認知され、世界各国で利用頂いております。

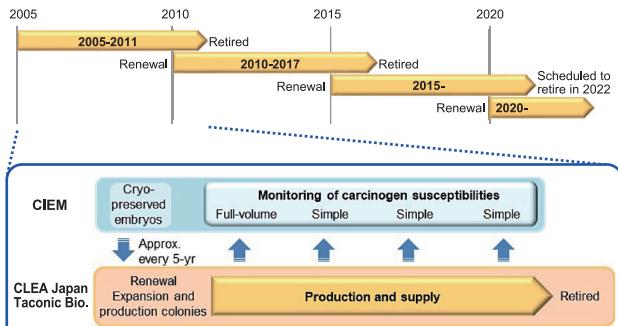
rash2マウス:生産システム

- ◆ rash2マウスの“発がん感受性”を永続的・安定的維持と安定供給のためにデザインされた生産システム



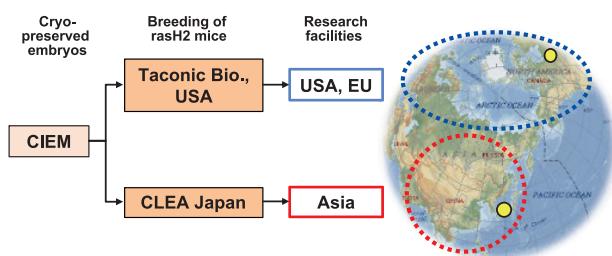
rash2マウス:品質管理システム

- ◆ rash2マウスの“発がん感受性”を確認・保証するためにデザインされた品質管理システム

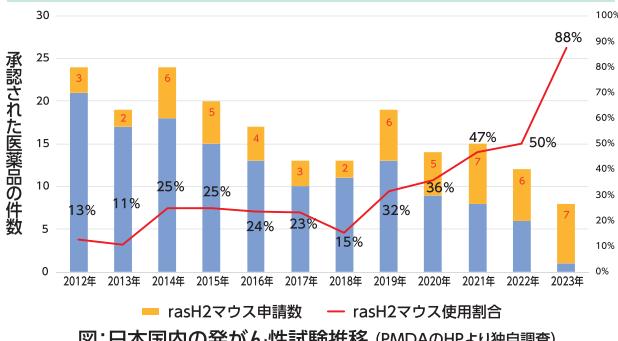


rash2マウス:グローバルな安定供給体制

- ◆ 日本クレア、Taconic Biosciencesにて、定められた生産システムに基づきrash2マウスを生産し、世界各国に供給しています。



発がん性試験が実施された医薬品の承認状況



受注センター
 東京 A D 部 〒153-8533 東京都目黒区東山1-2-7
 大阪 A D 部 〒564-0053 大阪府吹田市江の木町6-5
 仙台出張所 〒983-0014 宮城県仙台市宮城野区高砂1-30-24
 札幌出張所 〒063-0849 北海道札幌市西区八軒9条西10-4-28
 名古屋出張所 〒465-0093 愛知県名古屋市名東区一社3-79

TEL.03-5704-7123 FAX.03-3792-2368
 TEL.03-5704-7050 FAX.03-3792-2032
 TEL.06-4861-7101 FAX.06-4861-7108
 TEL.022-352-4417 FAX.022-352-4419
 TEL.011-631-2725 FAX.011-644-9209
 TEL.052-715-7580 FAX.052-715-7590

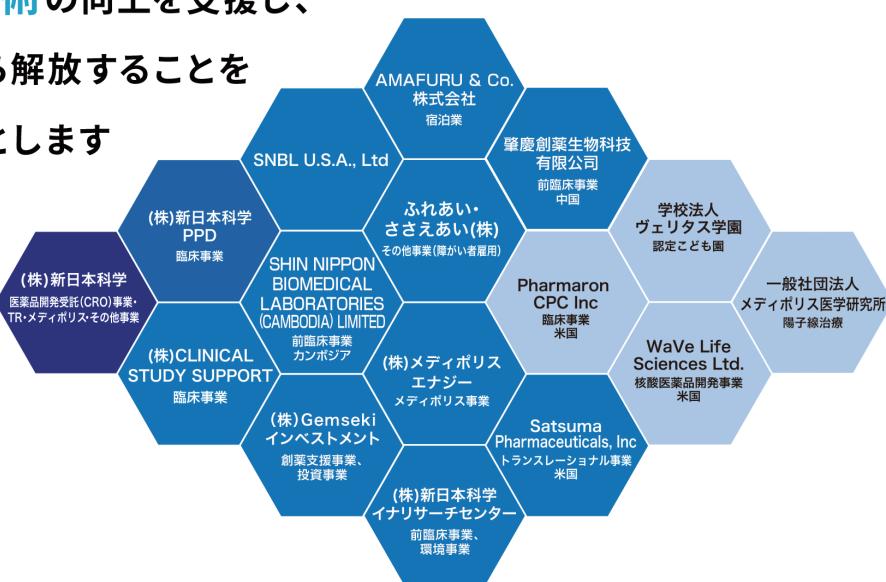


日本クレア株式会社

CLEA-Japan.com



創薬と医療技術の向上を支援し、
人類を苦痛から解放することを
絶対的な使命とします



(株)新日本科学は60年以上にわたる
豊富な経験と実績に裏付けされた確かな技術力により
質の高いサービスとニーズに合わせたソリューションを提供します



株式会社新日本科学

<https://snbl.com>

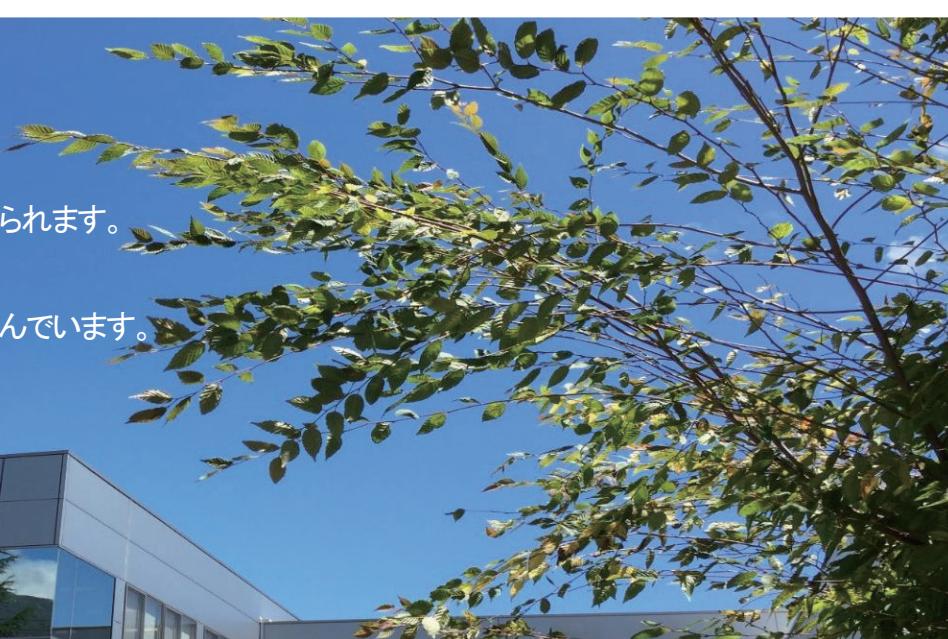
mail: info@snbl.com



SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS

新薬の研究開発に
寄り添う技術力

実験には、様々なノウハウと手技が求められます。
私たちは、「研究する心・想像する心」で
日々研鑽し、新しい技術の開発に取り組んでいます。
明日の医療の発展を願って…



医薬品・医療機器・再生医療等製品の開発支援
各種GLP適合・AAALAC International 完全認証施設

・安全性試験・薬効試験・各種検査
・臨床試験・翻訳サービス・SENDサービス

株式会社新日本科学イナリサーチセンター

<https://www.ina-research.co.jp>

SLCの実験動物



マウス

●アウトブレッド

DBA/1JmsSlc(コラーゲン薬物誘導関節炎)
BALB/cSlc
C57BL/6NCrSlc-C57BL/6JmsSlc(J由来)
C3H/HeSlc
C3H/HeNSlC
C3H/HeYokSlc
DBA/2CrSlc
NZW/NSlC
A/JmsSlc
AKR/NSlC
NC/NgaSlc(薬物・アレルギー誘導アトピー性皮膚炎)
CBA/NSlC
129x1/SvJmsSlc

●インブレッド

C57BL/10SnSlc
B10.A/SgSnSlc-B10.BR/SgSnSlc
B10.D2/nGsnSlc-B10.S/SgSlc

●ハイブリッド

B6D2F1/Slc(Slc:BDF1)
C86F1/Slc(Slc:CBF1)
CD2F1/Slc(Slc:CDF1)
B6C3F1/Slc(Slc:B6C3F1)
(NZW) BXSB) F1/Slc受注生産
※上記以外の系統については御相談ください。

●ヌードマウス(ミュータント系)

BALB/cSlc-*nu*(Foxn1^{nu})
KSN/Slc(Foxn1^{nu})

●疾患モデル

BXSB/MpJmsSlc-*Yaa* (自己免疫疾患)
C3H/HeJmsSlc-*lpr* (自己免疫疾患-Fas^{lpr})
C57BL/6JmsSlc-*lpr* (自己免疫疾患-Fas^{lpr})
MRL/MpJmsSlc-*lpr* (自己免疫疾患-Fas^{lpr})
NZB/NSlC (自己免疫疾患)
NZBWF1/Slc (自己免疫疾患)

WBB6F1/Kit^W/Kit^W-Slc(肥満細胞欠損貧血-Kit^W/Kit^{W-1}) NC/Nga(皮膚炎)

- ★ SAMR1/TaSlc(末梢臍リハ腫-SAM系対照動物)
- ★ SAMP1/SkuSlc(老化アミロイド症)
- ★ SAMP6/TaSlc(老年性骨粗鬆症)
- ★ SAMP8/TaSlc(学習・記憶障害)
- ★ SAMP10/TaDrSlc(脳萎縮・うつ様行動)

ラット

●アウトブレッド

Slc : SD
Slc : Wistar
Slc : Wistar/ST

●インブレッド

F344/NSlC
BN/SsNSlC
LEW/SsNSlC(薬物誘導性関節炎)

●ヌードラット

Slc : Long-Evans-rnu/rnu
●疾患モデル

- ★ SHR/Izm(SHR/Izmのコントロール)
- ★ SHRSP/Izm(脳卒中)
- ★ WKY/Izm(SHR/Izmのコントロール)
- ★ SHRSP5/Dmr(NASHモデル [HFC飼料給餌])
- DIS/EisSlc(食蟲発育性高血圧症)
- DIR/EisSlc(食蟲抵抗性)
- Slc : Zucker-fa/fa (肥満, Lepr^{ob})
- HWY/Rat(ヘアレスラット)

モルモット

●アウトブレッド

Slc : Hartley
ウサギ

●アウトブレッド

Slc : JW/CSK
Slc : NZW

ハムスター

●アウトブレッド

Slc : Syrian
スナネズミ

●インブレッド

MON/Jms/GbsSlc

無菌動物

●インブレッドラット

F344/NSlC(GF)

●インブレッドマウス(三協ラボサービス株)

Tsl : C57BL/6NCr

遺伝子改変動物

●マウス

C57BL/6BALB/c-nu/nu-EGFP(EGFP全身発現ヌードマウス)
C57BL/6JmsSlc-Tg('gmr delta')

BALB/c Rag-2-Jak3^{-/-}(高度免疫不全)

●ヌードマウス

C57BL/6BALB/c-nu/nu-EGFP(EGFP全身発現ヌードマウス)

●ラット

SD-Tg(CAG-EGFP) (グリーンラット)

★ Slc:SD-Tg(SOD1H46R-4)

●疾患モデル

- ★ APP/PSK-Tg(C57BL/6-Tg(APP^{PSK})) (オリーマ病理-老人斑形成なし)
- ★ APP/WT-Tg(C57BL/6-Tg(APP^{WT})) (APP^{WT}の対照動物)
- ★ Tau609 Tg(C57BL/6-Tg(tau609)) (タウ病理)
- ★ Tau784 Tg(C57BL/6-Tg(tau784)) (タウ病理)
- ★ Tau264 Tg(C57BL/6-Tg(tau264)) [Tau609, Tau784の対照動物
—ノーウィンウサギ—
★ OSK-KU(C57BL/6-Tg(OSK-KU)) (マウスAβを产生)

(特許第6323876号)

(株)星野試験動物飼育所

●アウトブレッドマウス

Hos : HR-1(ヘアレス)

●ハイブリッドマウス

Hos : HRM2(メラニン保有)

●アウトブレッドラット

Hos : OLETF(2型糖尿病)

Hos : LETO(OLETFの対照動物)

Hos : ZFDM-Lep^{rfa}(2型糖尿病)

(一財)動物繁殖研究所

●インブレッドマウス

IVCS(4日性周期)

C57BLKS/Jlar-Lep^{rfa}/+Lep^{rfa}(肥満2型糖尿病)

TSOD(肥満2型糖尿病)

●アウトブレッドラット

lar : Wistar-Imamichi

lar : Long-Evans

エンヴィーゴ(旧ハーランOEM生物動物)

●アウトブレッドラット

★ RccHan^W : WIST

●インブレッドマウス

★ CBA/CaOlaHsd

●免疫不全モデルマウス

★ C.B-17/IcrHsd-Prkdc^{scid}

その他(conventional動物)

●ミニブタ

☆(一財)日生研-NPO法人医用ミニブタ研究所

●マイクロミニピッグ

☆国内繁殖生産(富士マイクラ(株))

●医学用ベビーパタ(SPF)SHIZUOKA EXPIG

☆静岡県畜産技術研究所中小家畜研究センター

●ビーグル犬

☆国内繁殖生産(中伊豆支所)

●コモンマーモセット

★印は受託生産動物、☆印は仕入販売動物です。



日本エス エル シー株式会社

〒431-1103 静岡県浜松市中央区湖東町3371-8

TEL(053)486-3178代 FAX(053)486-3156

<http://www.jslc.co.jp/>

営業専用 T E L

関東エリア (053)486-3155代

関西エリア (053)486-3157代

九州エリア (0942)41-1656代

一般社団法人 日本毒性学会

【名誉会員（就任年度順）】

今道 友則	池田 正之	加藤 隆一	井村 伸正
佐藤 哲男	渡辺 民朗	小野寺 威	遠藤 仁
鎌滝 哲也	赤堀 文昭	土井 邦雄	長尾 拓
福島 昭治	津田 修治	吉田 武美	堀井 郁夫
大野 泰雄	上野 光一	山添 康	永沼 章
中村 和市	眞鍋 淳		

【功労会員（就任年度順）】

高伸 正	佐藤 温重	安田 峯生	大沢 基保
今井 清	降矢 強	玄番 宗一	唐木 英明
仮家 公夫	暮部 勝	野村 譲	牧 栄二
三森 国敏	佐神 文郎	遠山 千春	小野寺博志
杉本 哲朗	西田 信之	中村 和市	姫野誠一郎
眞鍋 淳	安仁屋洋子	横井 穂	久田 茂
青木 豊彦	山田 久陽	天野 幸紀	菅野 純
佐藤 雅彦	苗代 一郎	中江 大	鰐淵 英機
熊谷 嘉人	渋谷 淳		

【賛助会員（五十音順）】

●ダイヤモンド

株新日本科学 メディフォード

●プラチナ

第一三共

●ゴールド

旭化成ファーマ	あすか製薬
アステラス製薬	EA ファーマ
エーザイ	大塚製薬
小野薬品工業	花王
一般財團法人化学物質評価研究機構	科研製薬
杏林製薬	協和キリン
興和	三栄源エフ・エフ・アイ
サントリーホールディングス	(株)三和化学研究所
塩野義製薬	(株)資生堂
シミックファーマサイエンス	(株)新日本科学イナリサーチセンター
住友ファーマ	住友化学
(一財)生物科学安全研究所	ゼリア新薬工業
千寿製薬	大正製薬
大鵬薬品工業	武田薬品工業
田辺三菱製薬	中外製薬
トーアエイヨー	東レ
株式会社トランシスジェニック	(一社)日本化学工業協会
日本香料工業会	日本新薬
ファイザー	扶桑薬品工業
(株)ボゾリサーチセンター	Meiji Seika フアルマ
持田製薬	(株)薬物安全性試験センター
ヤンセンファーマ株式会社	ライオン

【役員】（2024～2025年度）

理事長	廣瀬 明彦
理事	朝倉 省二
	安西 尚彦
	鈴木 瞳
	奈良岡 準
	黄 基旭
	宮内 慎
	吉成 浩一
監事	杉山 篤
	三浦 伸彦

【学術年会長】

第 52 回（2025 年）黄 基旭

第 53 回（2026 年）宮脇 出

第 54 回（2027 年）安西 尚彦

第 55 回（2028 年）角崎 英志

【委員会】（2024～2025年度） ●印：常置委員会 ◆印：小委員会、WG

●理事長

廣瀬 明彦

● 総務委員会	委員長	藤原 泰之
◆ 連携小委員会	委員長	黄 基旭
◆ 評議員選考小委員会	委員長	北嶋 聰
◆ 名誉会員および功労会員選考委員会	委員長	藤原 泰之
◆ 指針検討小委員会	委員長	橋本 清弘
◆ 企画戦略小委員会	委員長	高橋 衆次
◆ ダイバーシティ推進 WG	WG 長	安西 尚彦
◆ 中高生向け企画小委員会	委員長	奈良岡 準

●財務委員会

朝倉 省二

● 編集委員会	委員長	銀治 利幸
◆ JTS 編集委員会	委員長	古武弥一郎
◆ FTS 編集委員会	委員長	藤原 泰之
◆ Executive Editor 小委員会	委員長	銀治 利幸
◆ 田邊賞選考小委員会	委員長	古武弥一郎
◆ 毒性学ニュース編集委員会	委員長	藤原 泰之

●教育委員会

土屋 由美

(小委員長・委員は 10 月末で交代)		
◆ 生涯教育小委員会	委員長	美谷島克宏
◆ 基礎講習会小委員会	委員長	橋本 清弘
◆ 認定試験小委員会	委員長	福島 民雄
◆ トキシコロジー 4ed. 編集 WG	WG 長	鈴木 瞳

●学術広報委員会

吉成 浩一

◆ 学会賞等選考小委員会	委員長	山添 康
◆ 佐藤哲男賞・学会貢献賞選考小委員会	委員長	姫野誠一郎
◆ 特別賞等選考小委員会	委員長	菅野 純
◆ 技術賞選考小委員会	委員長	三島 雅之
◆ 日化協 LRI 賞選考小委員会	委員長	小椋 康光
◆ 学術小委員会	委員長	吉成 浩一
◆ 広報小委員会・HP 担当	委員長	宮内 慎
◆ トピックス小委員会	委員長	黒岩 有一

その他関連の委員会

○ IUTOX 担当

Executive Committee, Director

○ ASIATOX 担当

ASIATOX Councilor

西村 泰光

廣瀬 明彦

田口 恵子

田口 恵子

小椋 康光

熊谷 嘉人

菅野 純

小野 竜一

西村 拓也

石塚真由美

菅野 純

石塚真由美

小椋 康光

部会

○ 生体金属部会

部会長 浅沼 幹人

○ 医薬品毒性機序部会

部会長 北嶋 聰

○ 付加体科学部会

部会長 上原 孝

2025年12月1日 印刷

2025年12月1日 発行

発 行 人 広瀬 明彦

編 集 人 錫治 利幸

毒性学ニュース編集委員会委員長 古武 弥一郎

発 行 所 一般社団法人日本毒性学会

学会事務局 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

パレスサイドビル

(株)毎日学術フォーラム

一般社団法人日本毒性学会事務局

TEL (03) 6267-4550 FAX (03) 6267-4555

E-mail : jsot@jsot.jp

振替 00150-9-426831

<http://www.jsot.jp>

印 刷 所 株式会社 センキヨウ

〒983-0035 仙台市宮城野区日の出町二丁目4-2

TEL (022) 236-7161